

J. London, *The Road*—19世紀末アメリカ社会の

インサイド・ストーリー——を読む

辻井榮滋

I

THERE is a woman in the state of Nevada to whom I once lied continuously, consistently, and shamelessly, for the matter of a couple of hours. I don't want to apologize to her. Far be it from me. But I do want to explain. Unfortunately, I do not know her name, much less her present address. If her eyes should chance upon these lines, I hope she will write to me.

It was in Reno, Nevada, in the summer of 1892. Also, it was fair-time, and the town was filled with petty crooks and tin-horns, to say nothing of a vast and hungry horde of hoboes. It was the hungry hoboes that made the town a "hungry" town. They "battered" the back doors of the homes of the citizens until the back doors became unresponsive.¹⁾

(ネヴァダ州にある婦人がいて、私はこの人に2時間というもの恥知らずにも嘘をつき通したことがある。彼女にあやまりたいとは思わない。そんな気はさらさらない。が、説明だけはしておきたい。あいにく彼女の名前を知らないし、ましてや現住所もわからない。もしご当人がこのくだりに目を触れるようなことがあれば、ご一報いただきたい。

それは1892年の夏、所はネヴァダ州リーノウであった。加えて、農産物共進会開催期で、町は腹をすかしたルンペンの大群は言うまでもなく、けちなごろつきやはったり賭博師でごった返していた。町を「飢えた」町にしたのは、飢えたルンペンたちだった。連中は、市民の家の勝手口を手ごたえがなくなるまで「叩いて物乞いをした」のだ。²⁾〈傍点筆者〉

英国の首都ロンドンの貧民窟イースト・エンドに自ら潜入し、その悲惨きわまる実態を克明に世に知らしめた、秀逸なルポルタージュ『どん底の人びと』(*The People of the Abyss*, 1903)の著者ジャック・ロンドン(1876—1916)が、このような北米大陸ルンペン放浪記なるものを書いていたとしても、何ら不思議はない。英米の違いはあれ、発達した資本主義社会の裏面を鮮明に写しとった仕事であるという点で共通しているからである。本稿では、彼が16歳および18歳(主として18歳)のときに発展著しいアメリカ社会の裏側でつぶさに見聞したり自ら行動したことを綴った *The Road* (1907) を取りあげて考察してみたいと思う。

J・ロンドンは、さまざまなジャンルにおいてパイオニアであった。上述のルポルタージュはもちろんのこと、ボクシング小説の開拓者でもあり、さらにはまた“the first American to write a road novel”³⁾でもあった。実は冒頭に引いた2節は、この *The Road* に収録された9篇のうち

の最初の「告白」(“Confession”)の、つまりは *The Road* 全体の書きだし部分なのである。傍点を付したあたりを中心に、初っぱなから *The Road* の本質的な諸特徴が顕著に表われている。

II

ロンドンが16歳といえば1892年、18歳といえば1894年のことで、アメリカ社会が大きくなうねりを見せて移り変わっていった時代である。不景気が波状攻撃を見せた時代で、とりわけ1893年の恐慌はよく知られており、8千以上(一説には1万)もの企業が倒産した。また1894年には、有名なプルマン・ストライキを始め、数々のストライキや工場閉鎖や暴動が相次いだ。サンフランシスコだけでも3万5千人の失業者を見たという。そんな時代状況にあってロンドン自身も、1892年には、前年に身を投じていた牡蠣密漁一味から足を洗い、逆に密漁巡視官代理に任命されて食い扶持を稼いだりした。が、陸に上がると、深酒をしたり、自殺未遂を図ったり、浮浪者たちに関心を抱いたり、……、と、変化の激しいかなりすさんだ生活を送っていた。そして、“road kids”と呼ばれた浮浪児たちと数週間つき合っていた折に、サクラメントからネヴァダ州まで初めて貨物列車による放浪の旅を敢行したのであった。

「どんな若僧も、『峠』を越えてはじめてさすらい小僧となる」——というのが、サクラメントで明細に説かれるのを聞いた放浪の掟であった。よし、自分も峠を越えて行って、みんなのちゃんとした仲間入りをするんだ。ところで「峠」というのは、シエラ・ネヴァダ山脈のことだ。(p.172)

この時から

放浪の旅は私をしっかりとつかんで、放そうとはせず、のちに、海へ航海に出て、さまざまなことをやったあとも、放浪生活にもどり、さらに長い旅をし、「目まぐるしく動く浮浪者」やベテランとなり、どっぷりと社会学という浴槽に飛びこんだのであった。(p.184)

と、放浪者になった発端や経緯を述べている。

上に見た時代状況(ロンドン自身も、「1893年の不景気な時代に」(p.88)と書いている)からも、ロンドン一家の生活が楽なものではなかったことは容易に推測できる。ただし、

During the years 1890 to 1893, there is no doubt that his family was in a state of extreme poverty, also in a wretched state of mind.⁴⁾

のように赤貧洗うがごとき状態だったのかということ、ロンドンの長女ジョウンによれば、それは当たらないという。後年彼女が書き残した書簡に、次のような一節が見られる。

May 22, 1964

Dear Al Shivers,

(中略)

Now, quickly, my father's "poverty-stricken" childhood and youth: suppose it comes down to semantics, and we should exchange definitions. The Londons were "poor," but in relation to the economic standards of the working class at that time, they were not "poverty-stricken."⁵⁾ They always had food, shelter and clothing ... on a par with their neighbors.

貧しかったには違いないのだが、当時の労働者階級の経済水準からすれば、「赤貧洗うがごとし」ほどではなかったようだ。いずれにせよ、一家を支えるために半端仕事をこなしながら、荒れた生活を送るうちに浮浪児たちとの出会いとなり、放浪の味を知ることになったのである。

1894年3月、ロンドンはそれまで過酷な労働条件のもとで働いていたオークランド=サン・リアンドロウ=ヘイワーズ電気鉄道の発電所を辞め、ケリー産業軍（1894年の春、失業者の大軍を組織し、首都ワシントンまで請願行進の指揮を執ったのがジャコブ・S・コクシーで、サンフランシスコ地域の一隊を指揮したのがチャールズ・T・ケリーなる人物）に合流することにした。これが、2度めの放浪へのきっかけとなった。無論、「失業者に仕事をまわせ！」との請願行進に加わることが目的だったのではない。

Consequently, the announcement in the Oakland newspapers that "General" Charles T. Kelly would lead the Western contingent of Coxey's Army of the Unemployed across the nation on flatcars was all the excuse Jack needed to hit The Road again.⁶⁾

彼が失業者軍と行動を共にしたのは、全行程5ヵ月のうちわずか1ヵ月余りにすぎないことでもそれは推測できるが、彼自身の言葉を借りれば、

これらの放浪者たちの話を聴いていると、わが牡蠣泥棒行為がまるで30セントぼっちに見えた。口にされる1語1語で新しい世界が私に呼びかけていた——(p. 170)

私が浮浪者になったのは——まあ、私の中にある活力、私をじっとさせてはおかないわが放浪癖のためであった。(中略)私が「放浪」に出たのは、避けられなかったからだし、自分のズボンに汽車賃がなかったからだし、一生「単調に」働けない質⁷⁾だったからだし、——まあ、放浪に出ないよりは出るほうがたやすかったからにすぎない。(p. 162)

といった2つの大きな理由が考えられるだろう。こうして、16歳のときと比べてはるかに長くてショッキングな出来事の多い2度めの旅が始まったのであった。これには余程の思い入れがあったらしく、1894年4月6日(金)夕方の16時30分に友人のフランク・デイヴィスとオークランドを出発したときから、5月いっぱいまでの2ヵ月近くにわたって、かなり詳しい日記(いわゆる⁷⁾"The Tramp Diary"なるもの)を書き残している。これを読むと、18歳にしてすでに将来のための

資料作りに励んでいたことがわかる。現に *The Road* そのものの中でも、5月25～29日の5日分だけではあるが、「放浪生活の実例として、わが脱走に続く数日間のことを自分の日記から以下に引いてみる」(p. 203)として、この日記を利用している。エチュレインも、“the diary reveals that at eighteen years of age London was a good storyteller, …”⁸⁾と指摘している。ちなみにこの *The Road* のものと実際の日記とを照合してみると、多少字句の修正がなされているものの、基本的には日記がほぼそのまま転記されたものと言っていいだろう。とりわけ、いつでも何をしたか、どんなことが行なわれたかなどにかかわる日付・曜日・時刻・場所等の正確な記述は、ロンドンがのちに記憶の再確認をするうえで貴重な力を発揮したばかりか、読者、特にその時点から数えれば百年以上もの歳月を超えて読むわれわれ現代人の目にも不思議なほどの臨場感を伝えるものである。

そこで、この2度めの放浪の足跡を彼自身の日記およびエチュレインの解説を中心に概観しておきたい。

4月6日(金)16時30分(以下、時刻は16:30というふうに表示)に、友人とオークランドを出発し、20:00にサクラメントに到着。ケリー軍は、すでに16:00にオグデンに向けてサクラメントを出てしまっていた。22:00のオウヴァーランドに乗る。以下、トラッキー、リーノウ、ウォズワース、ウィネマッカと、無賃乗車で乗り継いでいく。4月11日(水)には、フランクがオークランドへともどる。それからはカーリン、エルコ、ピーコ、ウェルズ、テラスと乗り継ぎ、4月14日(土)にユタ州オグデン着。その後ワイオミング州に入り、エヴァンストンからロックスプリングズを経て、大雪降りしきるなか山岳地帯を越えていった。4月17日(火)には、失業者軍のリーノウ支隊に追いついている。(この時から5月25日(木)までの1ヵ月余りの間、軍と行動を共にしたことになる。)以下、ネブラスカ州グランド・アイランド、オウマハ、ウェストン、アンダーウッド、ネオーラ、メンデン、アヴォウカ、ウォールナット、マーン、アトランティック、ワイオタ、アニータ、アデア、ケイシイ、スチュアート、デクスター、アーラム、ディ・ソウトウ、ヴァン・ミーター、ブーンヴィルと、小さな町村を徒歩で行き、4月30日(月)にようやくディモインに到着。ここでいわゆる旅のわらじを脱ぎ、数日間みんなで野球やキャンプファイア、歌等に興じた。以後は平底船を作って、ディモイン川からミシシッピ川へと下り、さらにケアロウからはオハイオ川を溯る水路をとることに決定。5月14日(月)にオタムワ、そして5月21日(月)にはイリノイ州クインシイに着いている。さらに5月24日(木)にはクインシイを立て、ミズーリ州のハニバルに到着。この日に軍を離れ、特急列車や家畜列車を乗り継ぎながら、5月29日(火)朝7:00にシカゴ到着。ここに至ってようやく“The first bed I had lain in since leaving home.”と記している。5月31日(木)には汽船に乗って、ミシガン州セント・ジョゼフにおばを訪ね、そこで数日を過ごし、それからシカゴにもどって、ニューヨークへと向かった。その後、6月下旬にバッファロウ行きの列車に飛び乗り、ナイアガラ瀑布を見たが、6月29日、再度瀑布を見たあと、放浪罪により30日間の投獄に服した。7月29日に釈放。あと、首都ワシントンに向かい、2週間ほど滞在。8月半ば頃には北へと向かい、ボルティモアで数日を過ごし、再びニューヨークを経て、9月初めにはボストンで数日間を過ごし、ニュー・イングランド地方を通過し、モントリオール滞在のちオタワから西へと大陸横断を敢行、ヴァンクーヴァーを経て、汽船でサンフランシスコへと帰り着いた。9月末から10月初めのことで、5ヵ月間の放浪であっ

た。

大ざっぱな足どりではあるが、ロンドンが時間的・地理的にどのようなコースを辿ったかの概要をうかがい知れるし、本稿で *The Road* を考察するうえでも有用な手がかりや判断材料となるだろう。

さてロンドンは、この2度にわたる放浪体験を近い将来において何としても活字の形で発表したいとの意向ないしは願いをかなり以前から抱いていた。まだ駆けだしの作家だった1899年当時に、友人のクラウズリ・ジョーンズに宛てた書簡で次のように書いている。

Long years ago — three, anyway, I wrote a synopsis of “The Road,” under that title, describing tramps and their ways of living, etc. It has been everywhere — every syndicate and big Sunday edition refused it as a feature article; but I kept it going. And lo, to-day, came a note of acceptance of same from the *Arena*.¹⁰⁾

1896年頃には、「放浪記」の梗概を書いてあちこちに送っていたようなのだ。この『アリーナ』誌からも、最終的には不採用となったのではあるが。それにしてもこの放浪体験に対する思い入れは深く、ようやく『コズモポリタン・マガジン』への連載が決まったのが、1906年12月のことであった。同月17日付の同誌編集部宛てた書簡で

Now, it happens that I have just finished my novel, *The Iron Heel*, and have just begun work on the first of a series of tramp reminiscences. I have 2,000 words of the first one of this series completed, entitled “Confession.” In this series I am giving true personal experiences of mine of the days when I was a tramp. …¹¹⁾

と書き、以下具体的な提案が行なわれ、『コズモポリタン』はこれを受諾した。そしてこの「告白」（“Confession”）が同誌の1907年5月号に掲載されたのを皮切りに、12月号まで毎号連載され、1908年3月号に載った「デカ」¹²⁾も含む9篇をひとまとめにして（但し、雑誌発表順とは若干異なる）*The Road* と題した単行本となって1907年11月に出版された。単行本の9篇のタイトルを順に列挙すると、

- ① Confession ② Holding Her Down ③ Pictures ④ “Pinched” ⑤ The Pen ⑥ Hoboes that Pass in the Night ⑦ Road-kids and Gay-cats ⑧ Two Thousand Stiffs ⑨ Bulls

である。読者の大方は、この目次に挙げたタイトルを見たとき、果たして中身の見当がついただろうか。ほとんどが俗語表現だからだ。（筆者は、拙訳書では取りあえず①告白 ②無賃乗車 ③情景 ④「しょっぴかれて」 ⑤刑務所 ⑥夜を走るルンペンたち ⑦さすらい小僧と新米ルンペン ⑧2千人のルンペン ⑨デカ という訳をつけてみた。）同じ編集部宛てた書簡でロンドンは、

It is my intention, later on, to publish the collection in book-form, under the title *The Road*, with the sub-title *Tramp Reminiscences*. Why could you not publish the series under the general title *The Road*, with the sub-title “Underworld Reminiscences,” or any other sub-title you wished to select for yourselves?¹³⁾

との意向および希望を述べている。この雑誌に対する希望のほう、すなわち各篇に適当な副題を添えることは、そのまま取り入れられた。すなわち、

- ① My Life in the Underworld
- ② Holding her down, more reminiscences of the underworld
- ③ Pictures, stray memories of life in the underworld
- ④ Pinched, a Prison Experience
- ⑤ The Pen, long days in a country penitentiary
- ⑥ Hoboes that Pass in the Night
- ⑦ Road-kids and Gay Cats
- ⑧ The March of Kelly's Army : The Story of an Extraordinary Migration
- ⑨ Adventures with the Police

〈下線筆者〉

下線を施したあたりが副題に相当する部分だが、これらを上掲の単行本の各タイトルと比較すれば、中身の見当がつくという点ではるかにわかりいい。雑誌の読者には、中身を読まずとも記事の大よその内容が容易にうかがい知れるからだ。

ところが単行本の場合には、上掲の通り各篇の副題はおろか、表紙にも扉にも副題は添えられなかった。それは、ロンドンの意向に反することであった。これには、*The Road* がロンドンの他の著作の売れ行きに悪影響を及ぼすのではないか、との出版社マクミランの G・P・ブレットの懸念が強く働いていたと見るのが妥当なようである。1907年3月7日付のブレット宛ての書簡の書きだしでロンドンが、

In reply to yours of February 28. No, if you put before me good evidence that the publication of *The Road* would be likely to damage the sale of my other books, it would not affect the question of my desire for you to go ahead and publish it. Though you have not stated your reasons, I think I apprehend them. And while it is possible that just immediately the sale of my other books might be slightly damaged, I believe ultimately there would be no damaging effect at all.¹⁴⁾

と、ブレットの懸念を強く打ち消している。そしてその根拠としてロンドンが主張したのは、

I have always insisted that the cardinal literary virtue is sincerity, and I have striven to live up to this belief.

If I am wrong in the foregoing, if the world downs me on it, I'll say "Good bye, proud world," retire to the ranch, and plant potatoes and raise chickens to keep my stomach full and strength in my body.¹⁵⁾

であった。すなわち、事実を書いたこと、誠実をモットーとしてきたこと、そうした自分の信念が受け容れられないようなら、隠退して農業に勤しむ決意まで表明しているのである。しかしながら、その結果はブレットの予想通り芳しくなかった。なるほどロンドン自身は、タヒチのパーピエテイからの書簡（1908年1月16日付）でブレットに宛てて

In the last mail I received quite a number of clippings of reviews of *The Road*, and thought from them that the book was being most favorably received.¹⁶⁾

と書いてはいるものの、仮に評者に好評されたからといって、売れ行き自体もそれに合わせて伸びるとは限らない。第一、*New York Times Saturday Review of Books*に掲載の、次のような（第1作についての）書評も見つかるのである。

"A man who has risen from the status of a common tramp to that of a successful novelist deserves much credit, and should be proud of his achievement. Jack London is evidently proud of his achievement, for he is now exploiting his experiences in the 'underworld' in a well-known monthly magazine, ('My Life in the Underworld,' *Cosmopolitan*.) but there is nothing of modesty in his pride. He glories in the facts that he lived by begging, stole rides on trains, and was skillful in eluding the police. These memoirs are certainly not praiseworthy, and will, I think, detract from his literary reputation. It is deplorable that he should so far debase his art."¹⁷⁾ — E. F. Allen.

と、ロンドンの無節操ぶりを手きびしくたしなめ、その芸術をはなはだしく低下させるものだと酷評なのである。また、彼の親友の1人G・スターリングにさえ不評¹⁸⁾だったことを付言しておく。ジョウン・ロンドンによれば、"*The Road* was released to an indifferent public. Brett's judgement had been correct. The book did not sell well,..."¹⁹⁾と、G・P・ブレットの懸念通り、*The Road*は大して売れなかった。

今見たいくつかの懸念・書評・不評から、当時の思潮が浮かびあがってくる。中身の詳細な検討についてはのちに譲るとして、今日の視点からは、当時の一般読者層の傾向の一端を知るための歴史的証言であるとは言えよう。

先に少し触れたが、各篇の雑誌掲載順と*The Road*における収録順が多少異なっている点について補足しておきたい。便宜上*The Road*収録順の番号で雑誌掲載順に並べかえると、①②⑤③④⑧⑦⑥⑨となる。少なくとも単行本では、エチュレインが

Most of the nine sections of *The Road* deal with enough specific incidents that they could

have been arranged chronologically to give the full impact of his travels.²⁰⁾

と指摘するように、ロンドンの行動を追った形での配列の仕方がなされていれば、もっと理路整然として風通しもよかつただろう。特にロンドンの辿った足跡を知る者にとっては、話があちこちに飛ぶので紛らわしいことは確かだ。たとえば2篇めの「無賃乗車」は、オタワから「カナダ太平洋鉄道で西へ向か」（p.35）う話であるから、最後の9番めとなるはずであるし、「しょっぴかれて」「刑務所」体験は、「2千人のルンペン」のあとで体験したことだからだ。3番めの「情景」にしても、刑務所体験後のことになる。“lack of unity”（統一がとれていない）と指摘される所以であろう。せめて①⑦⑥⑧④⑤③⑨②の順であったなら、読者の受けとめ方もかなり違っていたかも知れない。

Ⅲ

放浪体験を綴って雑誌掲載後には1冊にまとめたい、とのロンドンの思いは相当強かつたようで、それはその集中的な仕事ぶりからもうかがえる。端的に言う、「デカ」以外の8篇は1906年12月から1907年1月の間、すなわち、わずか1ヵ月半ほどのうちに一気に執筆されているのである。²¹⁾年表から少し拾いだしてみると、「告白」の執筆開始が1906年12月14日、脱稿が12月21日。「無賃乗車」は、12月29日に脱稿。「情景」は、1907年1月2日にはすでにかかっており、1月5日に脱稿。「しょっぴかれて」は、その同じ日に執筆開始、同月17日にはもう『コズモポリタン』に発送している。「刑務所」も1月16日に発送。「夜を走るルンペンたち」は、1月27日最終脱稿。「さすらい小僧と新米ルンペン」は、1月21日の執筆開始で、2月19日には発送。「2千人のルンペン」は、1月30日脱稿。恐るべき集中力というか、執念すら伝わってくる仕事ぶりなのである。

さて、外堀を埋める作業はこの辺にして、*The Road* そのものを取りあげていこう。本章では、この作品をユニークに仕上げている諸特徴を6点ばかりに絞って考察を進めてみたい。

まずは何といても多彩かつ特異な登場人物には舌を巻く。最初の「告白」の、ネヴァダ州はリーノウの中年婦人やミート・パイを頬張る男は、それ以後に登場するのが圧倒的にいわゆる“underworld”の人々であるだけに、「情景」に登場するペンシルヴェイニア州ハリスバーグの2人の未婚婦人や「無賃乗車」に登場する「白髪まじりの慈悲深い英国人、その品のある妻、それに美しく若いフランス婦人」（p.37）とともに、ごく普通の中流階級を代表する人物像と見てよい。彼らは、あらゆる意味で *The Road* の読者（特に後年の）に対し平均的一般市民としての1つの尺度を提供する数少ない人たちだからだ。さらには、物質的豊かさや今日の飽食日本——日本のほうがはるかに度外れだが——を象徴的に映しだしている鏡のような存在として読むことも可能だろう。あとは、「告白」の老水夫、「無賃乗車」で命がけのやり取りや知恵比べをする制動手・車掌・機関助手、「情景」のジブシーたち、「しょっぴかれて」「刑務所」の刑事や判事やイアリー郡刑務所での相棒や13名の小頭たちがいる。特に数名の囚人たちの奇行は、真に迫るものがある。ロンドン自身は、

われわれの^{ホール}通廊には、社会のがらくたや汚物、かすやくずがいっぱいおり、混乱が行き渡っていた——親譲りの役立たず、変質者、敗残者、精神異常者、混乱をきたした頭、発作を起こす者、極悪非道な者、虚弱者、つまりは人類の大変な悪夢だ。したがって、感情の激発がはなばなしく起こった。(p. 125)

と、えらく大げさな書き方をしているように思われるが、加賀乙彦もその名著で、

すでに文献で知っていた、さまざまな拘禁ノイローゼをここで観察しえた。とくに多く出会ったのは爆発反応であった。ドイツでは懲治場爆発（Zuchthausknall）とよばれ、フランスでも監獄の暴行発作（crise de violence）とよばれた状態で、囚人は壁や扉を乱打し、房内の器物をこわし、看守の制止もきかず叫び、あばれまわる。ときには、ガラスの破片で自分の体をひっかいて血まみれになったりする。²²⁾

をはじめ、「独居房は妄想の培養基といえる」²³⁾とか、その他ロンドンの記述を裏書きする言葉をいくつも残している。ロンドンの場合にはさらに、具体的に数名の囚人が細かく取りあげられている。すなわち、「二十歳ぐらいの白黒混血の美男子」(p. 119)「ロウヴァー・ジャックという平の小頭」(p. 125)「18歳ぐらいの若いオランダの少年」(pp. 126-7)「変わった人物」(pp. 127-130)といった囚人たちで、彼らにまつわるにわかには信じかねるほどの暴力・麻薬・発作・奇行・幻覚症状が報告されている。「夜を走るルンペンたち」では、「3千マイル（約4,800キロ）に及ぶ鉄道でカナダを横断し」(p. 131)ながらもついにはでくわすことのなかったスカイスル・ジャックなるルンペンのこと、ルンペンのあだ名のオン・パレード、ワイオミング州エヴァンストンの酒場の主人とのやり取り、カウンスル・ブラッフスの巡回酒場でみじめな夜を共に過ごしたスウェーデン人。「さすらい小僧と新米ルンペン」の冒険野郎たち——さすらい小僧たち。「2千人のルンペン」では、ケリー軍が行く先々で演じる人々とのやり取りや「人材は、2千人のルンペンの中からいくらでも探りだせる」(p. 190)の具体例——野球チーム・政治演説・宗教音楽会・歯医者・歌と踊り等々——には暗さなどまるでなく、特に10名の隊員たちの動向には一種壮大なスペクタクル映画を観る趣がある。最後の「デカ」にも、激しいやり取りをしたり追跡をする制動手や棍棒で殴りかかってくるニューヨークのデカ等が登場する。

何と多種多様な人々との遭遇であろう。彼らの大多数は、いわゆるごく普通の平均的市民ではない。しかも、小説や芝居に見る架空の登場人物ではなく、ロンドン自身が直接出会ったり見聞した人ばかりなのだ。それだけに、当時の一般読者の受ける衝撃や不快感は想像を絶するものがあっただろう。

第2点めに、スラングの多用も大きな特徴の1つである。単にそうした俗語表現を順に羅列してもあまり意味はないので、主な項目を立てて整理してみることにしよう。

① ルンペンおよびそれに類する呼称に関するもの

tramp-royal（高級浮浪者）

gay-cats（新米ルンペン）

profesh（ベテラン）

hoboes（放浪しながら時々働く）

tough（乱暴者）

smouge（ごろつき）

strong arms（暴力用心棒）

punks（ちんぴら）

blowed-in-the-glass（本物）

stiff（ルンペン、浮浪者）

bindle-stiff（渡り鳥…仕事をする浮浪者）

- prushun (浮浪児…浮浪者に代わって物乞いをする浮浪児)
- ② 物乞いに関するもの
- | | |
|-------------------------|---------------------------------|
| battered (叩いて物乞いをした) | hand-out (お恵み) |
| slamming a gate (門を叩いた) | threw his feet (乞食をする) |
| turned down (断わられた) | battering on the drag (街頭での物乞い) |
- ③ 食べることにに関するもの
- | | |
|------------------------|---------------------|
| scoffings (飯) | Java (coffee) (ジャワ) |
| poke-out (食い物) | hand-outs (食べ物) |
| set-down (ちゃんとした食事) | punk (パン) |
| mullingans (マリンガーシチュー) | chewin's (食い物) |
- ④ 睡眠に関するもの
- | | |
|---|---------------------|
| kip, doss, flop, pound your ear (いずれも、「眠る」) | |
| floppings (寝ぐら) | "kipping place (寝床) |
- ⑤ 金銭に関するもの
- | | |
|------------------|---------------------|
| light piece (小銭) | drag (リベート) |
| two-bits (25セント) | on the 'hog' (文なしで) |
- ⑥ 鉄道に関するもの
- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| Holding her down (無賃乗車) | con (車掌) |
| ditch (ほっぼり出す) | side-door Pullman (貨車) |
| shack (brakeman) (制動手) | box-car (有蓋貨車) |
| jerk (ローカル線) | flat-car, gondola (長物車) |
| decks (屋根) | hit the ties (線路を歩いていく) |
| decking her (列車の屋根に乗る) | blind (貨物車の端) |
| gunnel (腕木棒) | double-header (重連) |
| cross-rod (交差機) | Hit the grit! (降りろ!) |
| rod (鉄組の棧) | cut (切り通し) |
- ⑦ 警察に関するもの
- | | |
|-------------------|---------------------|
| John Law (サツ) | bulls (デカ) |
| pinched (しょっぴかれて) | soaked (こっぴどく罰せられる) |
| fly-cop (刑事) | |
- ⑧ 刑務所に関するもの
- | | |
|--------------------|---------------------|
| five-spots (5年の懲役) | push (模範囚) |
| hall (通廊) | hall-man (小頭) |
| lock-step (密集行進) | long-timers (長期服役組) |
- ⑨ 窃盗・強盗に関するもの
- | | |
|-----------------|-------------------------|
| get-away (ずらかり) | going through (ぶんどり) |
| glahm (かっぱらう) | rolling a stiff (仏を転がす) |
| pinches (パクる) | get-aways (とんずら) |

⑩ 卑語の類

son-of-a-gun (こいつめ)	you son of a toad (このくそったれめが)
blankety-blank-blank (野郎め)	ducks (やつら)

⑪ その他

crimpy (めっちゃ寒く)	kibosh (台なし)
mushing (いかがわしい商売)	con game (ペテン)
musher (ペテン師)	Break her out (錨を上げろ)
meat (心の糧)	In with her! (錨を引っぱりこむんだ!)
punk (火口 ^{ほくち})	main-stem (目抜き通り)
has a "pull" (顔がきく)	over 'the hill' (「峠」を越えて)
oryide (のんべえ)	put the 'kibosh' on (～をつぶす)
main-drag (目抜き通り)	kicks (靴)
shupers (ジョッキ)	sky-pieces (帽子)
monica (あだ名)	

以上11項目ほどに分類してみたが、無論これで網羅できたわけではない。まだいくつも挙げられるかも知れない。が、*The Road*の中で俗語表現がいかにかふだんに使用されているかを知るには十分であろう。こうした生きた俗語表現が、すでに見たさまざまな登場人物たちの間で躍動感をもって口にされる場面は、それらの意味がすんなりと理解できるかどうかは別として、*The Road*ならではの迫りに満ちていることは確かである。

第3点めは、比喩表現である。この点については過去にもロンドンの作品を取りあげた際に何度か言及しているが、*The Road*でもやはり看過するわけにはいかない。いわゆる直喩だけでも、全体にわたって30近くを数える。「ががつする狼みたいに」や「猫を木に追いあげた犬みたいに」(共に p. 51)「虎のかぎ爪の一撃のようなすばやさで」(p. 111)「オオシカの喉にかみついた狼みたいに」(p. 180)等々は、ロンドン一流の喩え方で、いわば常套手段ともなっているものだ。が、次のような場合はどうだろう。

少年は跳ねまわったり悲鳴をあげたり体を折り曲げ、しまいには糸で動く何やら異様なあやつり人形と言ってもいいようであった。(p. 74)

「通廊」というのは、廊下ではない。レンガでできた、6階建ての、各階に1列の小室、つまり、50の小室が1列になっている長方形の立方体を思い描いてみればいい——要するに、でっかい蜂の巣の立方体を思い描いてみるといい。(p. 95)

3分かかって、18歳のうぶ毛が私の顔からすり落とされ、私の頭はいが栗頭の荒毛の生えかかっている玉突きボールみたいにつるつるになる。(p. 100)

私は危なっかしい状況にあった。両足の先っぽを幅の狭い突出部にのせ、両掌を平らで切り立った両貨車の端に必死で押しあてて、立っていたのだ。しかも、両貨車はそれぞれに、上下前後に動く。サーカスの

騎手が、走る2頭の馬の背に片足ずつ置きながら立っているのをごらんになったことがあるだろうか？ 多少の違いはあっても、また、そういうことを私もやっていたわけだ。サーカスの騎手にはつかまる手綱があるが、私には何もない。騎手は足の裏を広く使って立ってられるが、私は足のへりで立っている。騎手は両脚と体を曲げ、姿勢をぐっと丸くして体を強め、安定した低い重心が得られるのに、私は直立して両脚をまっすぐにしたままでいなければならない。騎手は前方を向いているが、私は横向きに乘っている。おまけに、騎手は落馬してもおがくずに転がりこむだけだが、私のほうは落ちていれば車輪にひかれてずたずたになっていただろう。（pp. 223-4）

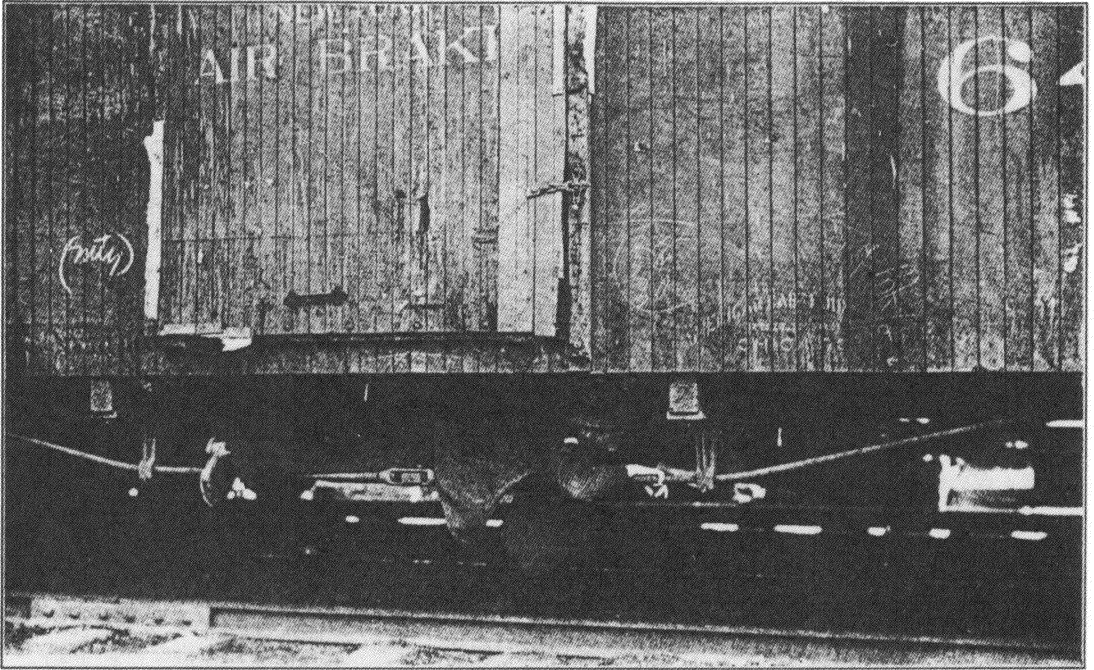
ジプシーの長いむちに打たれる少年の様子、刑務所の内部構造、刑務所内での散髪の様子、そして貨物列車に無賃乗車した際の危険性を喩えて述べたものだが、そのような場に居合わせたり体験をしたりしたことのない一般読者にとっては、想像力を働かせるうえできわめて有効な喩え方と言えるだろう。とりわけサーカスの騎手と2頭の馬の背の喩えは、読者に最も鮮烈な印象を与えるものと言えるだろう。

第4点めには、イラスト写真の効用を挙げたい。口絵も含め合計48枚ものイラスト写真が入っているのである。ロンドンの他の著書にも写真やイラストを配したものは数多いが、すべて1ページ大で48枚も使用している作品となると、見あたらない。大小にかかわらず枚数の点だけからすれば、『どん底の人びと』（*The People of the Abyss*, 1903）や『太古の呼び声』（*Before Adam*, 1907）などがその筆頭格に挙がるだろうが、いずれにせよ、一般の読者が経験し得ないような、あるいは多分に想像を必要とする内容の作品ばかりである。少しでも読者の想像力を補えたら、との配慮が伝わってくる。特に *The Road* の場合は懇切丁寧で、ロンドン自身もブレット宛ての書簡（1908年1月16日付）で

I cannot tell you how much I appreciate the splendid way in which you brought out *The Road*. I like those photograph illustrations very much, and was glad also to see that you included the drawings from *The Cosmopolitan*.²⁴⁾

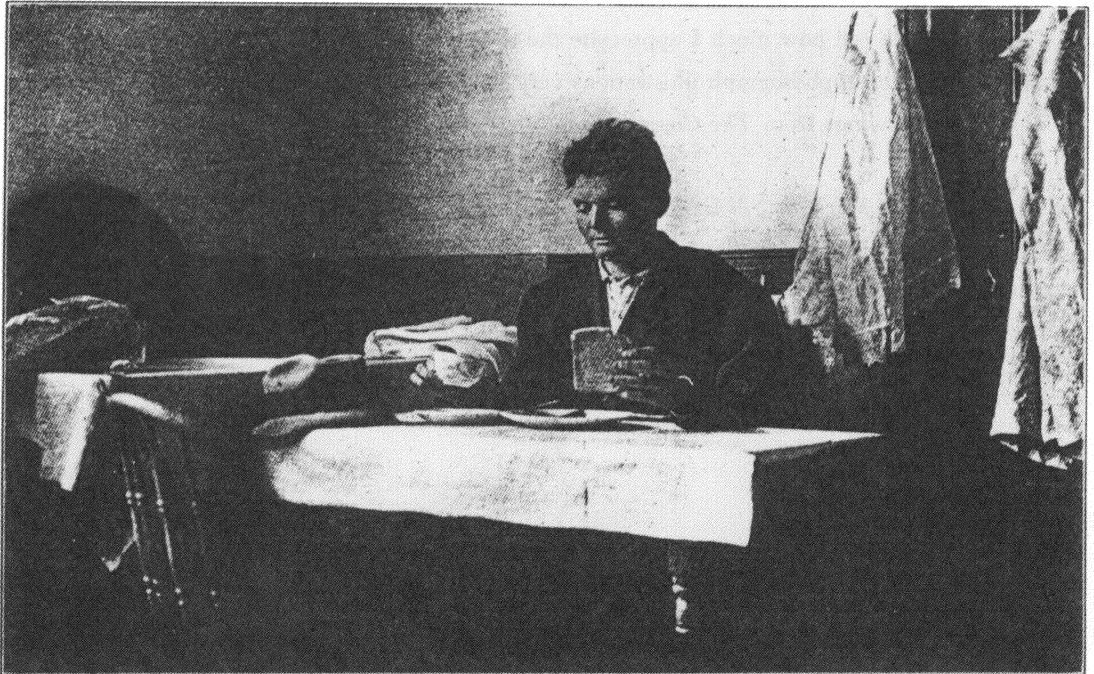
と、その仕上がり具合にすこぶる満足している。そこで、48枚すべてとまではいかないまでも、筆者の独断でそのうちの6枚だけを選んで原寸大でお目にかけてみたい。なお、各イラスト写真に付いているキャプションも原本通りである。

①



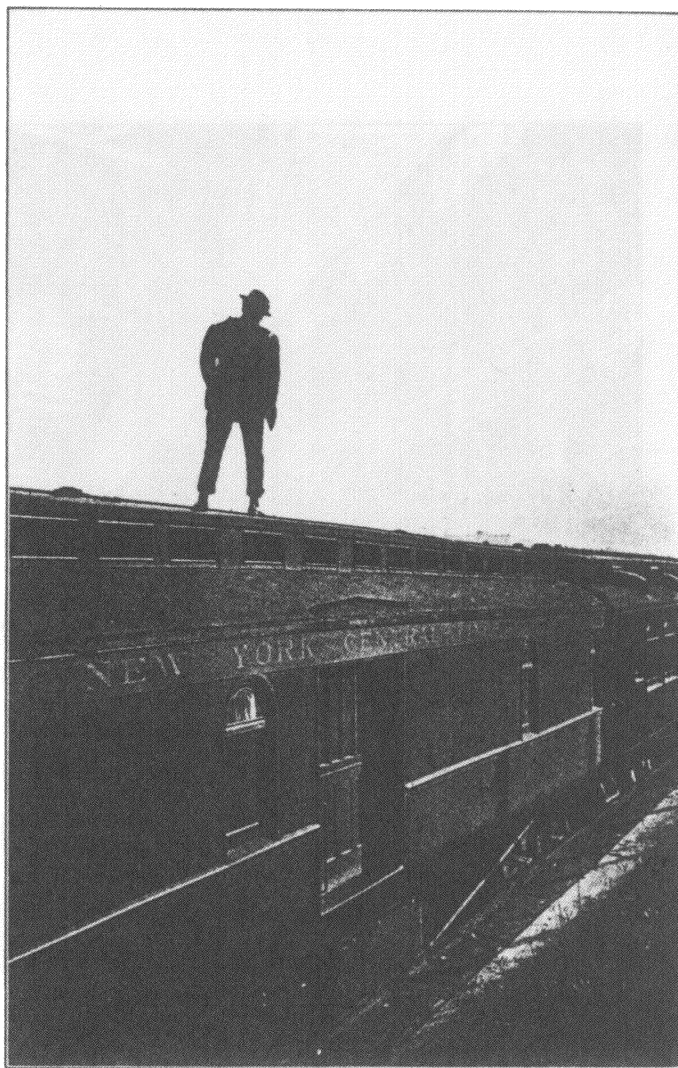
On the Rods.

②



A "Set-down."

③

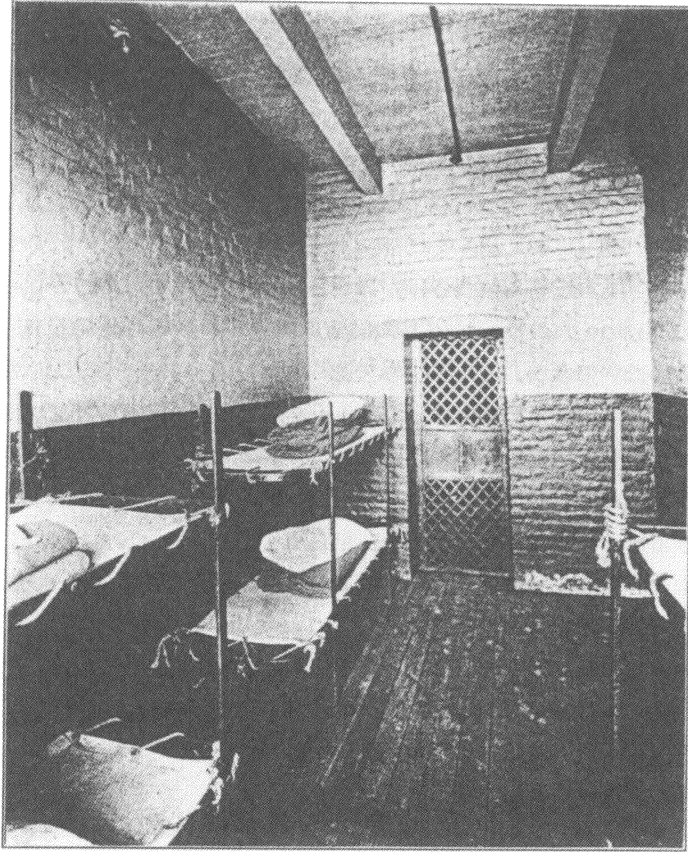


I rise to my feet and walk down the train half a dozen cars.

④



⑤



Our Bunks.

⑥



By a bonfire.

- (① 鉄組の棧の上に乗って。②「ちゃんとした食事」③ 私は立ちあがって、列車を6輛にわたって歩く。) ④ 各階に1列の小室。⑤ 寝台。⑥ 焚き火のそばで。)

このちょうど8倍の数のイラスト写真が配されているとなれば，“underworld”の部分も多少は見えてこようというものである。

第5点めは、*The Road* に特有の表現が見いだされる点である。まず目につくのは、「覚えていない」「忘れた」といった類いの表現が散見される。本稿の冒頭に引用した書きだし文からして独特な書き方で、ここにも「あいにく彼女の名前を知らないし、ましてや現住所もわからない」(傍点筆者)が含まれている。このほかにも、「どんな説明をしたのかさっぱり思いだせず」「…今日までわからない」(共に p. 86)「私の記憶に間違いがなければ」(p. 155, p. 213)「私の言葉を信用してもらいたいのだが」(p. 178)「私の思い違いでなければ」(p. 214)なども見える。これらの表現は、一見無定見な姿勢を露呈していそうで、その実妙に真実味を感じさせる効果を生んでいる。第Ⅱ章で概略を辿ってみたように、ロンドンの放浪の足跡は逆にあれほど詳細に日記に書き残しておかねばならないほど長く複雑なものであった。その折ごとに書きつけた日記にすら誤りが散見できるほどだから、のちにその日記を頼りに綴っていった放浪記にこうした表現が現われたとしても決して不自然ではない。むしろそれらは、他の記述にはうそ偽りが無いことを暗示するものとさえ言えるだろう。

次に、自分の才覚に揺るぎない自信と誇りを込めた表現が明らかに見てとれる点である。その数は、全体で14、5ヵ所に及ぶ。「誰にも負けない腕を持っているにもかかわらず」「…というのが私のかたく信じているところだが」(共に p. 9)といった言いまわしが「告白」の初めあたりから顔をのぞかせる。ほかにもいくつか拾ってみると、

俺は、体力と機敏さと若さに恵まれているじゃないか(私は18歳で、健康状態は申し分がなかった)。それに、俺には「ガッツ」があるじゃないか。しかも、俺は高級浮浪者^{トランプ・ロイヤル}ではないのか。こいつら浮浪者にして、俺と比べりゃ単なる青二才で、「新米ルンペン」で、素人じゃないか。(pp. 40-1)

それで、ちょっとここで言うとおこうと思うのは、若くて元気な浮浪者だけが旅客列車の屋根に乗れるということであり、そのうえ、その若くて元気な浮浪者には同様に度胸がないとだめだ、ということである。(p. 46)

たまたま私は融通性に富んだ人間であり、ほとんどどこであらうと適応していだけの生活についての理解力を身につけていた。(pp. 92-3)

お粗末なニュー・イングランドの「ローカル線」のうす汚い制動手ごときに、生き生きとした力強い言葉づかいで負けてなるものか。(p. 212)

といった調子だ。筆の走りすぎとも受けとめられかねない表現である。事実、すでに取りあげた通り、「誇りに謙虚さがまるで感じられない」との辛口批評も見受けられるが、一般の市民が普通には見聞できないようなさまざまな事実をこの目と耳でしかと見聞してきたのだ、との熱い思いが自信や誇りとなって表出したものと考えられる。

さらには、暴力を描かせたらロンドンの右に出る者はいないと言われるロンドンだが、当然の

ことながら *The Road* にもそうした真に迫る場面——「有蓋貨車の中や水槽のそばや刑務所の独房の中で、血なまぐさい虐待の話の数々」(p. 55)——を扱う描写に満ちている。ジプシーの群れの長から 2 人の少年と女性が受ける残酷なむち打ちや、20 歳ぐらいの白黒混血の美男子に 8 名の小頭が寄ってたかって行なう仕置のことなどは、すぐに思い浮かぶ好例であろう。それらは、ロンドンが発揮する真骨頂と言っている。

最後に第 6 点めの特徴としては、どちらかと言えば暗く深刻な題材を扱っているにもかかわらず、すなわち、「過酷な状況下でありながら、重くのしかかってくるような暗さは不思議と読みとれない」(p. 237) 点である。ロンドン自身が、「さすらい小僧と新米ルンペン」の冒頭でこう書いている。

私が浮浪者になったのは——まあ、私の中にある活力、私をじっとさせてはおかないわが放浪癖のためであった。(中略) 私が「放浪に出たのは、避けられなかったからだし、自分のズボンに汽車賃がなかったからだし、一生「単調に」働けない質だったからだし、——まあ、放浪に出ないよりは出るほうがやすかったからにすぎない。(p. 162)

いわばゲーム感覚の放浪だったのであり、そのことを証明する文言には事欠かない。「物乞いを楽しい奇行と見なしていたこの私」(p. 25)「弁解はしない。恥ずかしいとは思っていないからだ。私を彼女の戸口へと導いたのは、若さであり、生きる喜びであり、経験に対する強い関心だったのだ」(p. 29)「私には無限の若さがあり、2 日間待つなんてとてもできないだろう」(p. 31)「若さの楽天主義」(p. 57)のロンドンと制動手の知恵比べ(「無賃乗車」全体)「たぶん浮浪者生活の最大の魅力は、単調なところがないことだろう」(p. 63)「放浪の魅力がいっそう傲然と私を捕らまえるのだった」(p. 169)等々。最後にもう 1 例。

強盗を働くことは男らしく、施しを乞うことはあさましく卑劣であったのだ。ところが、誠たしかに、短期間で施しを乞う腕をあげたものだから、ついには物乞いを楽しいはずら、知恵くらべ、度胸をつけるものと見なすようになった。(p. 171)

以上が主なものだが、「楽しい」「放浪癖」「若さ」「単調でない」「知恵くらべ」といったキーワードが浮かびあがる。これらの言葉に暗さの気配はみじんも感じられない。筆者なりにつなぎ合わせれば、「楽天主義の若さが放浪癖にあと押しされて、シビアな知恵くらべを要する単調ではない放浪の旅に出た」とでもなろうか。そうしたロンドンのゲーム感覚を育んだ土壌が、第 II 章の冒頭で見た時代状況と彼の環境とのかかわりであった。「人生は駆け引きだ」(p. 207)が、幼い頃から身に染みついていた彼ならではの放浪観である。無論、時代の息吹も行間に感得できる。F・フェイエッドも、その興味ある著書の中で次のように述べている。

『ザ・ロード』におけるロンドンの文章全体の調子は、あくまで肯定的で楽天主義的である。経済構造の告発としてのホーボーの苦境について語っている個所でさえ、その感じがある。ロンドンの作品を貫いているのは、彼自身の性格からくる元気のよさや時代のもつ力だが、同時に、それは、たとえ修羅と泥沼にはまった人、つまり打ちのめされたはずれ者たちでさえ、生きてさえいれば、いつか、よりよい日々がめ

ぐってくる、古いものを踏台にして新しい、よりよい社会が築けるのだという、ロンドン究極の確信でも²⁶⁾ある。

IV

多少長くなったが前章では、*The Road* の独自の仕上がりに寄与している特徴を6点ばかり拾い出して考察を進めた。（それらは諸刃の剣で、一方でロンドン独自の仕上げを見せた半面、読者・評者・出版社側の不評や懸念を惹起することにもなった。）では、それらの諸特徴を骨格にしなが、その間から、あるいはその向こうから何が見えてくるのか、どんな訴えが聞こえてくるのか、本章ではそのあたりを追究してみたい。

たしかに16歳時あるいは18歳時の若者時代の放浪体験記であり、若さと楽天主義に支えられたものではあったが、*The Road* はただそれのみに終始しているわけではない。もしもそのようなものであったなら、

ジャック・ロンドンは、トランプあるいはホーボーのことをよく知り、理解を示した。それをうかがわせることばで書いた、記憶に値する最初のアメリカ作家である。²⁷⁾

との評価を得ることもなかったであろうから。

そこでまずは、作家ロンドンの storyteller としての原点がこの放浪体験にあるという点から見てみよう。なるほど15歳で牡蠣密漁群に身を投じたことも、その翌年に密漁巡視官代理に任命されたことも、また17歳でアザラシ狩り船『ソフィア・サザランド』号に乗り組んで7ヵ月間日本近海を航海したことも、無論のちにさまざまな形で活かされたのは事実である。特に、3つめの航海体験が作家としての出発点となる記念碑的作品（“Story of a Typhoon Off the Coast of Japan”）を生んだことは、過去に詳細に論じた通り²⁸⁾である。しかしながら、その後の作家ロンドンの大きなバックボーンとなったものは、やはりこの放浪体験であったと言わざるを得ない。彼は、その原点の1つを「告白」で次のように述べている。

軽くノックをし、それに答えた中年の婦人の優しい顔を見た時、触発されたかのように自分の語るべき「話」が思い浮かんだ。乞食の成功はうまい話ができる能力しだいだ、ということをご承知おき願いたい。まず第1に、出会った瞬間に、乞食はそのえじきを「見て判断」しないといけない。あとは、当のえじき特有の個性なり気性なりに受けるような話をしないといけない。（中略）準備の時間は、1分たりとも許されない。電光石火のごとくえじきの性格を見抜き、急所をつくような話を思いつかないといけない。上出来のルンペン^{ルンペン}は、芸術家でなければならない。創作は自然発生的で、即時でないといけない——それとも、豊かな自分の想像力から選んだテーマに基づくのではなく、ドアを開けた人の顔に読みとったテーマに基づくのでないといけないのだ。（中略）この浮浪者時代の修業にこそ、物語作家としての私の成功の多くは拠っているのである。生きるよすがとなる食べ物を得るためには、もっともらしく聞こえる話をしなければならなかったのだ。動かさえない必要から勝手口に立ち、短篇の技巧のあらゆる大家によって策定された説得力と誠実さが展開される。加えて、私を写実主義作家にしたのはわが浮浪者としての年季

奉公だった、とかたく信じている。写実主義^{リアリズム}というのは、勝手口で食べ物と交換できる唯一の商品なのだ。煎じ詰めれば、芸術とは申し分のない巧妙さにすぎないのであり、巧妙さが数多くの「話」^{ストーリー}を作るのだ。（pp.16-7）

この話にうそ偽りはあるまい。良きにつけ悪しきにつけ、あれほど大量の「話」（短篇だけでも約200篇）を作りだしたことでそれは首肯できよう。臨機応変の対応をしなければ、乞食は勤まらなかったのだ。そうしたきびしい現実を前に「写実主義^{リアリズム}というのは、勝手口で食べ物と交換できる唯一の商品」であるという確信を得、それが彼のその後の生涯にわたる骨身にしみた哲学として定着することとなった。この箇所は、まさに作家としてのロンドンの真髄がもろに表われているところであろう。

ああ、12年前、食卓にすわった当時の、あの2人の魅力あふれるすてきな婦人のことが、今も目に浮かぶ——私は世の中を渡り歩いてきたさまを語り、本物の威勢のいい男らしく、2人の思いやりのある助言なんか無視して、自分の冒険ばかりか、それまでつきあったり秘密を語りあった他のあらゆる連中の冒険話で、2人を感動させたのだった。（pp.66-7）

もう1つ、横断列車の貨車の中で80人を越すルンペンの間でもみくちゃにされたときのことを書いている。

そのあとに起こったことは、記憶が曖昧模糊としている。まるで脱穀機の中を通ったようだった。貨車の端から端まであちへこちへへと、球みたいに打ちかわされた。その80人のルンペンたちが私を振るい捨ててしまうと、わが痛めつけられた体は、何やら奇跡的に、休めるわらをちょっぴり見つけた。私は、陽気な仲間の中に加えられたのだ。その日はあと、吹雪の中を貨車に乗って進み、暇つぶしに、1人1人何か話することになった。話はいい話でなければならず、しかも、誰も聞いたことのない話でないのだめだ、という決まりだった。うまくいかなかった時の罰は、脱穀機だ。誰もしくじらなかつた。私がこの場で言っておきたいのは、生まれてこの方あんなにすばらしい話をする道楽などやったことがないということだ。何しろ世のいたる所から来た男たちが84人おり——私が85人目になった——、各人が傑作を話すのだ。傑作でないのだめなのだ。傑作でなければ脱穀機だからだ。（pp.154-5）〈傍点筆者〉

傍点を付したあたりは、Ⅲ章で取りあげた諸特徴の別の例でもあるのだが、この2つの引用箇所を読むと、ロンドンが躍起になって話のネタを拾い集めたり、また自らも話を生みだしていった苦勞が手に取るようにわかる。（しかもこうした努力は、放浪体験のあとでも続けられた。よく知られているのは、この時から3年後の1897年（21歳の時）にクロンダイク地方へのゴールドラッシュに加わった際、長いひと冬をヘンダースン・クリークの小屋で過ごした時などを中心にさまざまな冒険談を仕入れたことである。）即興で人を納得させたりうならせる語りと内容を持ちあわせなければ、にっちもさっちも行かない状況に追いこまれるわけだから、小説家の卵にとってこれらに優る修業の場はなかったであろう。そのような現実のなかで揉まれ揉まれしながら着実に職業作家としての力量を身につけていったところが、作家ロンドンの原点であり強みでもあろう。

もう1つ見えてくるきわめて重要な点は、この放浪体験を通してロンドンが浮浪者の目つぶさに社会の裏側を眺め、そこから社会の仕組みや経済構造などを見通した所産としての確固たる信念に基づく発言を行なっていることである。「告白」の中で、物乞いに行く先々でことごとく断われた時の、

極貧者たちのところへ行つて、食べ物をもらわないといけないような気配になりだした。極貧者たちは、飢えた浮浪者が切羽詰まって確実に頼みにできる者なのだ。極貧者たちは、いつだって頼みにできる。飢えた連中をはねのけたりなど決してしない。合衆国のいたる所で、丘の大きな家からは食べ物を拒まれたことがたびたびあった。なのに、私がいつだって食べ物を受けとったのは、川の支流とか沼地のそばの小さな掘っ建て小屋、それも、こわれた窓がぼろ切れで詰めてあったり、仕事で打ちひしがれたくたびれ顔の母親のいる掘っ建て小屋からなのだ。ああ、君たち慈善屋よ！ 貧乏人のところへ行つて学ぶがいい。貧乏人だけが慈善家なのだから。彼らは、あり余っていて与えるのでもなければ、与えずにおくというのでもない。余分なものなど何もないのだ。彼らは自分たちのために必要なものから、それも、大てい自分たちのために切実に必要なものから与えるのであり、決して控えることはしない。犬に骨をやるのは慈善ではない。慈善とは、犬同様に腹をすかしている時に、その犬と一緒に食べる骨なのだ。(pp. 11-2) (傍点筆者)

と、極貧者と中流以上の階層の者たちとを慈善を絡めて比較しているところや、例の2人の未婚婦人に対し

2人がくれた何杯ものコーヒーや卵や何口かのトーストに対して、こっちは十分な値打ちを提供した。もののみごとに、2人をもてなしたのだ。私がやって来て2人の食卓に着いたことが、2人の冒険であり、冒険というのは、とにかくきわめて貴重なものなのだ。(p. 67)

に見てとった彼女らと浮浪者との落差などは、ロンドンが見た社会の裏側のまだほんの一端にすぎなかった。これがさらに進むと、浮浪者の存在を肯定する発言にまで至る。

もしも浮浪者が合衆国から突然いなくなったりでもしたら、大勢の家族が広範な不幸に見舞われることだろう。浮浪者がいるから、数千もの人々がまっとうな暮らしをし、子供を教育し、信心深く勤勉な子供を育てられるのだ。そうなのだ。かつて、私の父（養父ジョン・ロンドンのこと）は巡査をしていて、生計のために浮浪者狩りをしたことがあった。地域社会は彼の捕らえた全浮浪者に対し1人いくらで支払い、おまけに父は、たしか、マイルあたりの旅費ももらった。わが家では、やりくり算段がつねにさし迫った問題であり、食卓の肉の量、新しい靴、1日の外出、あるいは学校の教科書といったものは、浮浪者を追跡する父の運に左右されていた。今もよく覚えているのだが、もの欲しさと不安を抑えながらも、毎朝、父の前夜の苦勞の結果がどうだったか——何名の浮浪者をしょっぴき、有罪宣告の見込みはどうだったか——を待ち受けたものであった。そんなわけで、のちに、浮浪者として、自分がある略奪目的の巡査をうまくかわして逃げた時、その巡査の家にいる小さな子供たちのことを気の毒に思わずにはいられなかった。ある意味では、自分がそれらの子供たちから多少よいとこ取りをやっているように思えたからだ。(pp. 206-7)

と、具体的に自分の家族まで引き合いに出しており、これがいわゆる「トランプは「経済上の必

要悪」²⁹⁾という命題」の展開につながっていくのである。

こうした放任体験のなかでも最も過酷で、その後のロンドンの人生観ないしはイデオロギーを決定づけたものが、イアリー郡刑務所における30日間の服役である。まずは逮捕・裁判・投獄に至る不当な手続きに対する激しい憤りを聞こう。

陪審による裁判の権利はおろか、服罪か無罪申し立ての権利も奪われた茶番劇の裁判のあと、こうして刑に処せられたのだ。もう1つわが祖先たちが闘争目標にしたもの——人身保護令状——が、さっと私の脳裏に浮かんだ。やつらに教えてくれん。けれども、私が弁護士を呼んでくれと頼むと、笑われてしまった。人身保護令状は結構だが、拘置所の外部の者と意思疎通もできないのに、そんなものが何の役に立つというのか？ いや、やつらに教えてくれん。俺を永久に投獄しておくなんてできやしないのだから。まあ俺が出るまで待っている、それだけだ。やつらをびっくりさせてやる。俺は法律と自分の権利について多少は知っているから、やつらの司法の失政を暴いてやる。(p. 90)

何から何まで納得のゆかない理不尽な司法側のやり方に対するロンドンのやり場のない怒りが、ちょうど13年後に『コズモポリタン』1907年7月号掲載の「しょっぴかれて」においてこうして爆発したわけである。執筆開始は1907年1月5日だから、それでも体験時から12年半も経っているのに、これほどの怒りをあらわにできるのには、よほどの強い思いや恨みがあつたからであろう。こうした恨みつらみは、1ヵ所だけにとどまらない。

私は、くよくよすることはなかった。30日といっても、そんなに長くはない。30日間いて、出獄したら、強欲な司法の連中ども相手に利用するつもりでデータのたくわえを増やすんだ。アメリカの少年が、権利や特権をこんなふうに踏みにじられた時に何ができるか、証明してやるんだ。自分は、陪審による裁判の権利を奪われた。有罪を認めるか、無罪を申し立てるのかの権利も奪われた。裁判すら否定された(私がナイアガラ瀑布で受けたのは、裁判とは考えられなかったからだ)。弁護士はおろか、誰とも話しあうことも許されなかった。したがって、人身保護令状を請う権利も奪われたのだ。顔は剃られるわ、頭髪は坊主刈りにされるわ、体には縞の囚人服を着せられた。パンと水で重労働させられ、武装した看守に見おろされながら恥ずかしい密集行進をやらされた——またいったい何のために？ 俺が何をしたというのか？ こんなにもひどい腹いせをされるなんて、俺がナイアガラ瀑布の良民に対してどんな罪を犯したというのか？ 俺は、いわゆる「屋外で眠る」市条令を犯してもいない。あの夜は、町の管轄区外の郊外で眠ったのだ。食事の恵みを乞うたこともなければ、街頭で「小銭」をせびったのでもない。自分がやったことといえば、町の歩道を歩いて、つまらない滝を見入っただけだ。なのに、そのことにどんな罪があるというのか？ 法的には何の軽罪も犯してなんかない。よーし、出獄したら、証明してやるんだ。(pp. 106-7)〈傍点筆者〉

どうにも怒りはおさまらない。積年の悔しさに正義感も加わって、たぎる血潮にあと押しされる格好で吐きだされた思いと言える。

さらには、刑務所内に生き地獄を見たことは、われわれの想像を絶する強烈なインパクトを彼に与えたに違いない。前章でも若干触れた、数々の服役囚の顔などはその代表格であるし、ほかにも「13名の人でなしが、5百名の人でなしを牛耳っていた」(p. 117) 具体的な事例は数多い。それでもなお、その恐ろしい

虐待の詳細については、触れないことにする。要するに虐待というのは、イアリー郡刑務所の文字にはできないきわめて数少ない恐怖の1つにすぎなかったということだ。「文字にはできない」と言ったが、公平に評すれば、「まったく考えられない」とも申さねばならない。この目で見るまで私にはまったく考えられないことであり、世間や人間の墮落した恐ろしいどん底といった点で、私は青二才ではなかった。イアリー郡刑務所の底まで達するには、重りをずいぶん深く下ろさねばならないだろうが、私としてはそこで見たままの事どもの上っ面を少しだけ、しかもひょうきんにすくい取ってみせるしかない。(pp. 117-8)

とまで述べているほどだから、その詳しい中身たるや凄惨を極めるものだったのだろう。ただ、世人の知らない刑務所内の恐怖や暴力の実態をどうしても書きとめておきたい、知らせたいとの思いが、ペンで描きこめる限度ぎりぎりのところまで書きこませたのであり、それが「刑務所」なのである。

これまで見てきた放浪や服役体験を単に事実として写しとるにとどまらず、さらに資本主義体制や社会経済システムの批判にも踏みこんだ点に *The Road* の特色と意義がある。刑務所内での小頭たちの不正利得に言及して、

われわれは通廊^{ホール}内での経済上の支配者であり、文明の経済支配者そっくりの方法でごまかしをやらした。囚人たちの食料供給を支配し、ちょうど外界にいる同業の悪党たちそっくりに、人々に法外な金を支払わせるわけだ。われわれは、パンを方々にばらまいた。週に1度、中庭で働く連中は、5セントのかみタバコを受けとった。このかみタバコは、この一国（刑務所という）の貨幣だ。(中略) そのうえわれわれは、ただ刑務所の外の先輩たちを手本にしたまでのことだ。だって彼らは、もっと大規模に、商人や銀行家や実業家と体よく偽って、われわれのやっていることと寸分違わぬことをやったのだから。(p. 112)

ああ、まったくわれわれは狼だったのだ——ちょうどウォール街で商売をしている連中みたいに。(p. 115)

刑務所全体が、通信線網におおわれていたのである。それで、通信系統を管理しているわれわれは、当然のことながら、資本主義社会のひな形だったから、顧客から重税を取り立てた。(p. 123)

と述べているいくつかの件には力がこもっている。刑務所内で行なわれていたことの見聞が筋金となり、その後のロンドンの社会観を大きく育んだ。それは、釈放後の放浪途中で1つの確たるイデオロギーへと昇華することになる。バルトロップも、

Undoubtedly Jack London's socialism was conceived at this time. It is always put down to what he saw and experienced in his travels across America — the discovery of the victims of the capitalist system and the destruction brought about by it.³⁰⁾

と書いている。ロンドン自身も、長篇 *Martin Eden* の中身を圧縮してエキスのみを取りだしてまとめたような別のエッセイ「人生は私にとって何を意味するか」(“What Life Means to Me”)の中で、

The capitalist takes away the possessions of his fellow-creatures by means of a rebate, or of a betrayal of trust, or by the purchase of senators and supreme-court judges.³¹⁾

… all the time the food they ate and the beautiful clothes they wore were brought out of dividends stained with the blood of child labor, and sweated labor, and of prostitution itself.³²⁾

と、資本家や搾取に対するきびしい批判を行なっている。このエッセイは、*The Road* のシリーズを手がける1年近くも前に同じく『コズモポリタン』に掲載されたものなのだが、表現の仕方に違いはあっても放浪体験で得たことをきちんと伝えている。かくして、

The working class lived under a system which rendered it helpless. Mere superiority in numbers did not matter. Unemployed, the workers had organized themselves into armies whose marches had accomplished nothing. Arrested, they were denied their rights and sent to prison. Awareness that he was a member of this class became knowledge, and everything that he learned stimulated him to learn more.³³⁾

と、社会における自分の位置を見定め認識をあらたにしたロンドンには、勉強の必要性を痛感し、オークランドに帰り着いたあとは、いよいよ自己の教育に本腰を入れはじめることになった。また別のエッセイ“*How I Became a Socialist*”³⁴⁾の中でも、この放浪体験によって人生をまったく違った角度から捉えるようになったこと、社会の地獄絵をまざまざと見たこと、その地獄から筋肉労働によってではなく（頭脳労働によって）はい出る決心を固めたことなどを披瀝している。

V

以上本稿では、ロンドンの作家としての本質を決定的なものにした北米大陸ルンペン放浪体験の記 *The Road* についての考察を進めきた。そこには彼の竹馬の友F・アサートンが指摘するように、

Jack was enamored with wanderlust; he wanted to travel and see the country. Furthermore, he was disgusted with common labor; disgusted with trying to learn a trade.³⁵⁾

といった資質を見逃すわけにはいかない。生来の放浪癖に加え、度重なる肉体労働に対する嫌悪感という2つの性行が、社会の地獄の淵をのぞき見たことによって、その仕組みやからくりへ気づき、それらを批判力を備えたペンで写しとることに成功させたのだ。なるほど発表当時には、すでに見た思潮もあって、広く迎え入れられることはなかったものの、今日的視点からこの仕事を読むと、少なくとも2つのポイントが浮上する。1つは、19世紀末アメリカ社会の裏面史の一部を相当正確に写しとった、いわば貴重な証言たり得ている点で、アメリカン・ドリームインサイド・ストーリーと呼んでもいいだろう。もう1つは、ロンドンの体験からちょうど百年以上も経過しているにもかかわらず、*The Road* の内容がいっこうに古く感じられない点だ。具体的

に言えば、ロス暴動に見られるような人種問題、ホームレス、失業などに結びつく現代社会のひずみが活写されており、現代社会が百年前の現実と本質的にはほとんど変わっていないことに気づかされる点なのである。

もっと身近なわれわれ現代日本人に問題を引き寄せて考えてみてもよい。上野瞭氏が最近のエッセイで、この高度経済成長期を称して「今では「見えるもの」と言えば「食の豊かさ」だけである」と書き、FAO（国連食糧農業機構）の報告（1990年の時点で、アフリカだけで1億7千万人が飢餓状態にあり、21世紀には3億に達し、他の地域の栄養失調人口を加算推計すると、6億8千万人が飢えることになろう）を紹介しながら、「この膨大な「飢え」は、飽食の日本では遠い「他人事」になっている」と述べている。こうした現代日本と、ロンドンが思いをこめて写しとった百年前のアメリカ社会の裏面とは、まるで対極にある。ところが、ロンドンの見聞した社会の底辺部と上のFAOの報告とはどこかで響きあう。問題は、社会の矛盾から目をそらして飽食に浮かれる現代日本人や「3K」（きつい、きたない、きけん）を嫌う世代にこそあるのである。最近では「3K」どころか、若者の清潔志向が行き過ぎ状態にあるという³⁷⁾。ロンドンの浮浪者とはまるで相容れない関係だが、果たしてどちらがより人間的なのであろう。*The Road* は、そうした現代日本の若い世代にも自分の意識を見つめなおす機会を与えてくれるものである。ロンドンの文学的想像力の根源を明らかにしたこの作品は、『どん底の人びと』と並ぶ古くて新しいメッセージを発し続けている。

注

- 1) Jack London, *The Road* (本の友社復刻版 *THE WORKS OF JACK LONDON*, Vol. 11, 1989), p. 1.
- 2) 拙訳書『アメリカ浮浪記』（新樹社、1992）、p. 8。以下本書からの引用は、引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 3) E. L. Doctorow, *Jack London, Hemingway, and the Constitution* (New York: Harper Perennial, 1994), p. 12.
- 4) Georgia Loring Bamford, *The Mystery of Jack London* (Oakland: The Piedmont Press, 1931), p. 52.
- 5) 筆者が1992-3年留学の際、カリフォルニア州サンマリーノウのハンティントン図書館で読んだJack Londonの自筆原稿（JL 15462）より。
- 6) Earle Labor, *Jack London* (New York: Twayne Publishers, 1974), p. 30.
- 7) *Jack London on the Road*, edited by Richard W. Etulain (Utah State University Press, 1979), pp. 30-56. *The Road* の中でも “I kept a diary on part of the trip, …” と書いている。（p. 185）
- 8) *Ibid.*, p. 30.
- 9) *Ibid.*, p. 30. オークランド出発時の数は約700名だったという。
- 10) *The Letters of Jack London*, Vol. One, edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard (Stanford University Press, 1988), p. 97.
- 11) *Ibid.*, Vol. Two, p. 654.
- 12) Jack London Foundation のウィニフレッド・キングマンによる筆者への回答によれば, “Your question about *The Road* is difficult to answer. I’m not really sure what the explanation is, but I’ll tell you what I think. Jack London had submitted all of these episodes to *Cosmopolitan* magazine and they were printed each month from May to December 1907 and then in March 1908. Meanwhile Brett had started putting them into book form for Mcmillan and had the book finished and

- published in November 1907. Since *Cosmopolitan* was a monthly magazine they had no way to publish all of them by the time the book came out. However, I don't know why they held "Bulls" until March 1908." とある。
- 13) *The Letters of Jack London*, Vol. Two, p. 672.
 - 14) *Ibid.*, p. 675.
 - 15) *Ibid.*, p. 675.
 - 16) *Ibid.*, p. 728.
 - 17) *The Letters from Jack London*, edited by King Hendricks and Irving Shepard (New York: The Odyssey Press, 1965), p. 246.
 - 18) *Ibid.*, p. 257.
 - 19) Joan London, *Jack London and His Times* ([1939], Seattle and London: University of Washington Press, 1968), p. 329.
 - 20) Richard W. Etulain, *op. cit.*, p. 17.
 - 21) Russ Kingmen, *Jack London: A Definitive Chronology* (California: David Rejl, 1992)
 - 22) 加賀乙彦『死刑囚の記録』([1980], 中公新書, 1983), p. 20.
 - 23) 上掲書, p. 50.
 - 24) *The Letters of Jack London*, Vol. Two, p. 728.
 - 25) *The Letters from Jack London*, p. 246.
 - 26) Frederick Feied, *No Pie in the Sky — The Hobo as American Cultural Hero in the Works of London, John Dos Passos, and Jack Kerouac* (New York: The Citadel Press, 1964), p. 40. 邦訳は、中山容訳『ホーボー アメリカの放浪者たち』(晶文社, 1988), p. 60.
 - 27) *Ibid.*, p. 23. 中山訳, 同上書, p. 28.
 - 28) 拙稿「ジャック・ロンドン: その習作期に於ける作品についての一考察」(『現代英語文学研究』第3号, 1975), pp. 42-55および拙稿「"Story of a Typhoon Off the Coast of Japan" 再考— The *Morning Call* を巡って」(『現代英語文学研究』第7号, 1981), pp. 54-71参照。
 - 29) Frederick Feied, *op. cit.*, p. 26. 中山訳, 上掲書, p. 36.
 - 30) Robert Barltrop, *Jack London — the Man, the Writer, the Rebel* (London: Pluto Press, 1976), p. 44.
 - 31) *Jack London / American Rebel*, edited by Philip Foner (New York: The Citadel Press, 1967), p. 393.
 - 32) *Ibid.*, p. 397.
 - 33) Joan London, *op. cit.*, p. 84.
 - 34) Philip Foner, *op. cit.*, p. 364.
 - 35) 筆者が1992-3年留学の際, 上記図書館で読んだ Frank I. Atherton の手になる原稿 (p. 214) より。
 - 36) 京都新聞, 1997年8月14日, p. 12.
 - 37) 同上, 1997年8月30日(夕), p. 9によると, 電車のつり革を絶対握らないとか, 座席にすわるときはティッシュペーパーでふかないと気がすまないとか, 抗菌グッズの激増, 果ては「上司の触ったペンは使いたくない, というOLも多い」という。